＜研究ノート＞

災害派遣活動に参加した精神保健福祉士の変化
～東日本大震災における職能団体の活動を通して～

日本社会事業大学　専門職大学院 14 期修了
島　津　屋　賢　子

Ⅰ．はじめに

公益社団法人日本精神保健福祉士協会 (以下「協会」と略す) の災害派遣活動のはじまりは阪神淡路大震災である。2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に際し、協会は被災地でボランティア活動をする構成員を募集し派遣する活動 (以下「派遣活動」と略す) を行った。筆者は 2012 年の派遣活動に参加した。また、同年より、協会の災害支援体制整備委員を拝命している。

Ⅱ．背景

1．派遣者を対象としたアンケート調査

2013 年、災害支援体制整備委員会は協会から被災地支援の派遣を依頼した構成員 (以下「派遣者」と略す) を対象としたアンケート調査を行った。125 名に調査用紙を郵送し 79 名より回答があった (回答率 63.2％)。その調査項目のうち「被災地支援の経験で「自ら有益であった」と感じた項目」に、約 50％の回答者が「専門職としての価値・倫理が確認できた」「被災地支援により日常に還元できる経験や技術が向上した」としている（公益社団法人日本精神保健福祉士協会「東日本大震災・支援活動記録集」編集委員会 2015）。本稿では、先行調査に準じ、派遣活動に参加した精神保健福祉士（以下「PSW」と略す）を「派遣者」と記述する。

2．災害ソーシャルワーク

上野谷は、ソーシャルワークとしての復興支援を池埜の定義である「災害によって翻弄された人生の主導権を被災者に再獲得してもらうための支援の総体」ととらえ、災害ソーシャルワークについて「ソーシャルワークは、生活の原理原則に基づき、被災者を支援し続ける使命と役割があります」と提言している（池埜聡 2012、上野谷加代子 2013）。

Ⅲ．先行研究レビュー

1．協会の災害派遣活動の記録と評価

大塚は、協会の派遣活動の評価として、「自治体の活動を補完する役割に徹し自治体保健師が休息できるよう心がけたこと、引き継ぎは現地支援者の手を煩わさないよう派遣者同士による引継ぎに配慮したこと、住民の環境調整などソーシャルワークの視点を追って活動したことなどから、地元保健師から高い評価をいただくことができた」と報告している（大塚淳子 2012）。

2．学生の災害ボランティアに関する研究

安部は、東日本大震災時に災害ボランティアを行った学生が様々なゆらぎ (対人支援の現場で支援者が直面する動揺や葛藤、不安等の総称) に直面したことを明らかにしている。そうしたゆらぎへの対応が不足している支援者ケアの内実に着目し、災害ボランティアにかかわる学生を学習者としてとらえ、ゆらぎの意識化を可能とするふりかえりの場の創出を提案している（安部芳絵 2012）。

石田らは、災害ボランティア活動の教育効果を活動量で分類した。その内、短期集中で行った活動における教育効果として、①動機の充足や目的達成による自己実現、②対人関係能力やコミュニケーション能力の向上、③社会的承認欲求の充足による自己有用感の向上の 3 点を報告している（石田易司 2013）。

小林らは、災害ボランティア経験のインパクトについて、参加した大学生の意識・行動が変化したと報告した。特にライフ・キャリアに影響を与えるものとして位置づけ、態度的な側面における変化や成長があったと結論づけた。さらに、一般的なボランティア活動と災害ボランティア活動を比較して、ボランティア自身も災害からの影響を受ける存在であることを確認した（小林功英ら 2014）。

3．業務短期派遣された専門職に関する研究

西郷らは、災害医療支援者を対象に、侵入的想起症状に対するコントロール可能性の高いものは外傷後ストレス症状が低く、逆にコントロール可能性が低いものは外傷後ストレス症状が高いという仮説の検証を行った。その結果、仮説の支持を得て、災害医療支援者は医師や看護師などの専門的なトレーニングを積んでいることと、活動現場が避難所や被災していない施設の中での活動であり外傷体験が少なかったことから、派遣後 1.5 ヶ月時点で PTSD 有症状者がいなかったと考察している（西郷達雄ら 2013）。

兪らは、派遣された消防職員に東日本大震災の被災地での救援活動による急性ストレス反応は外傷後成長とも正の関連を示したことを明らかにした。また、同僚からのサポートは職業的救援者としての成長に繋がり、家族からのソーシャルサポートは感謝につながることを明らかにした（兪善英ら 2016）。

Ⅳ．研究の目的と意義

本研究の目的は、派遣者が「自ら有益であった」と感じたことを精査し、それが派遣活動後の PSW としてのあり方にどのような変化をもたらしているのかを明らかにすることである。その成果をフィードバックすることで、災害ソーシャルワークへの関心を PSW に喚起するという点で社会的意義がある。

Ⅴ．方法

1．対象

協会の東日本大震災・支援活動記録集派遣構成員一覧（総数 125 名）より、東京支部で、2011 年に 1 回、派遣活動に参加した派遣者 7 名全員を抽出した（東日本大震災・支援活動記録集 2015）。調査文書の郵送は協会事務局に依頼した。協力者が少なかったため、同条件で都内近県の支部に所属する派遣者計 9 名を抽出し同一方法で協力依頼した。調査依頼文書を郵送した 16 名のうち、回答書の返送があったのは 11 名だった。拒否､無回答 2 名を除いた協力表明 9 名より、訪問調整が可能だった 8 名を調査対象とした。

2．方法

個別訪問によるインタビュー調査。録音データより逐語記録を作成した｡逐語記録をコード化し、KJ 法を援用して分類・分析した。

1) 調査の概要

インタビューガイドを作成し、調査依頼文に同封した。インタビュー調査対象者には文書・口頭で説明し、同意書作成した後、インタビューガイドを用いた半構造化面接を行った。面接時間は 30 分から 1 時間程度。

(1) 調査項目：①性別、②年齢、③ソーシャルワーク業務の経験年数、④現在の主たる勤務先の属性

(2) インタビュー項目：①日本精神保健福祉士協会の被災地支援活動への応募の動機あるいはきっかけはどのようなことでしたか？②派遣時期、派遣地、活動内容、印象に残っていることを述べて下さい。③被災地支援活動で自分に有益だったと感じたことがありましたか？④被災地に赴いた前と後ではソーシャルワーカー人生に変化がありましたか？⑤被災地への思いやメッセージを自由に述べて下さい。

2) 調査期間：2017 年 8 月 1 日～ 9 月 10 日

3．倫理的配慮

2017 年 6 月の協会理事会へ本研究計画についての協議を申請し承認された。インタビュー調査は個別に行った。インタビュー前に、文書と口頭で実践研究の目的等を説明したうえで同意書を作

成し、同意撤回について説明し同意撤回書を提示した。

収集したインタビューの録音データに対しては個人情報保護に配慮し、分析にあたっては個人名や所属等が特定できない処理をした。データや情報は厳重適切に管理、取扱い、破棄した。

Ⅵ．結果

1．インタビュー調査対象者の属性

1) 性別、年齢、経験年数、勤務先

表 1 に調査対象者の属性を示す。調査時の年齢構成は 30 代 1 名、40 代 5 名、50 代 1 名、60 が 1 名だった。経験年数の平均は 18.8 年だった。

表 1　インタビュー調査対象者の属性

	性別	年齢	経験年数	勤務先
1	男性	30 代	13 年	医療分野
2	女性	40 代	14 年	医療分野
3	女性	40 代	24 年	行政分野
4	男性	40 代	22 年	医療分野
5	男性	50 代	26.5 年	医療分野
6	男性	40 代	10 年	医療分野
7	男性	40 代	16 年	地域分野
8	女性	60 代	25 年	地域分野

2．インタビュー調査の結果

録音データは 4 時間 58 分だった。逐語記録を、研究目的に引き寄せてコーディングを行い、KJ 法を援用して分類し 130 のラベルを生成した。ラベルは意味内容ごとに二次コーディングを行い、小カテゴリー 35 個を生成した。さらに三次コーディングとして階層式に分類を進め 16 個の中カテゴリーから 6 個の大カテゴリーを生成した。本稿では、大カテゴリーを《》、中カテゴリーを【】、小カテゴリーを〈〉、ラベルを [] で示す。データ抽出した記述は「」で示す。

生成された大カテゴリーのうち、本実践研究の目的である派遣活動に参加した PSW にとって「有益であったことの精査」および「どのような変化をもたらしたのか」にかかわるカテゴリー《答えの出ない問いへのスタートライン》と《ソーシャルワーカーとしてのあり方に定着した変化》を抽出し、それらのカテゴリーの内部構造を表化 (表 2) した。

さらに、派遣活動に参加した派遣者の変化の動因について、ソーシャルワーカーの成長に関する先行研究に照合・考察し、派遣活動に参加した PSW の変化のプロセスを図解化 (図 1) した。

3．インタビュー調査の内容

1) 応募の動機あるいはきっかけ

動機は、ボランタリーな熱意、ソーシャルワーカーの専門職的使命感、未曽有の災害に際して何もできていない不全感等だった。帰宅困難や計画停電等の被災体験も動機につながっていた。心のケアチームでの派遣体験や県外避難者を支援した経験の影響もあった。このような動機づけが醸成されていた時期に、協会が派遣者の募集を始め、応募勧奨したことが、応募のきっかけになっていた。

2) 派遣時期、派遣地、活動内容、印象に残っていること

(1) 派遣時期、派遣地

時期は 2011 年 6 月～ 11 月。期間は 1 週間。派遣地は福島県 B 市、宮城県 C 市。

(2) 活動内容

派遣活動の具体的内容は、派遣自治体の看護師、保健師の補助業務だった。避難所支援と仮設住宅移行期の活動があった。避難所では、精神障害のある被災者への直接支援や健康相談会等でのメンタルヘルス活動を行った。仮設住宅移行期は、保健センターに拠点を置き、地域住民からの電話・面接相談対応や避難所でスクリーニングされた住民の居宅あるいは仮設住宅への家庭訪問を行った。11 月の派遣者は、12 月に協会の派遣活動を終了するにあたり、家庭訪問によるフォローを終結するか、現地サービスに引き継ぐかという視点のアセスメントに注力していた。

(3) 印象に残っていること

被災地に実際に身をおいて見た風景と被災者が淡々と語る衝撃体験のインパクトが多く語られた。さらに、こうした被災地や被災者との交流体験によって生じたゆらぎが印象として残っていた。

表２　カテゴリーの内部構造

カテゴリー			［ラベル］	「データ」（逐語記録からの抜粋）
≪大≫	【中】	〈小〉		
復興という答えの出ない問いへのスタートライン	絶望との対話	現地の風景のインパクト	衝撃	まあ、衝撃、ズドーンていう気持ち
			人のいない感じ	あちこちに雑草が生えちゃってて、人のいない感じ
			近くに津波が来た	もしかしたら尊い命が、波にさらわれちゃったのかなって
			戦争があったのか	海辺に行ったらもうあの、映像のとおりで、そこに戦争があったのか？
			不条理	たった2キロくらい、海と陸地なんて、こんだけ違うのかていう不条理
			全体が灰色	近くに津波が来たんだなっていうような、泥のあとが見えたりだとか、
				信号はまずつかないし、全体が灰色っていうかね、砂と。
			ここで生活していた	がれきにビデオテープが落ちてた、ここで生活していたんだろうなって
			現地の様子	現地の様子も、石巻も、空いた時間かなり見させてもらえた
			災害の爪あと	ニュースなんかでみるのと生で見るのとはインパクトが違って
				圧倒的な災害の爪痕っていうのを肌で感じることができた
		復興格差	復興の速度の違い	人が住んでるところの復興の速さと、少ない所の復興の速度の違い
		余震	また地震	行くバスの中で、一斉に携帯メールが鳴って、また地震だって
		住民との交流体験	メンタルヘルス	接するのは当事者と決めつけていた、実は違う、新しくリスクを負われている方
				狭義の精神保健福祉じゃなくメンタルヘルスっていう部分でかかわる必要性
			訪問	やってみたいなっていうのがあったので、訪問するっていうことが有益だった
			なかなか飲み込めない	その日にあって次の日になくなったのをわかりますかって言われて、
				すごいことが起きたことを記録に落としていくのに時間がかかる
	自職場とは違うやりがい	ＰＳＷの誇り	ＰＳＷの視点	PSWとしての誇りみたいな、視点を活かして支援入れているのを確認
				この人の生活どうしようって考える、そこはワーカーなんだろうな
				自分だけじゃなくても他の人とも視点が、生活に根付いている
			ソーシャルワーカー〇〇	ソーシャルワーカー〇〇として動けた
				より所属から離れた一人の精神保健福祉士、ソーシャルワーカーという意識
			やっぱり精神保健福祉士	感じたのがやっぱり精神保健福祉士っていいってこと、その思いは今もある
				Ｐが大事、精神が根源になって、人が生きづらくなることが多い
		普段の実践	普段の実践が活きた	普段やってる実践が活きたことを感じたので、戻った後も活かせた
		PSWの柔軟性	ソーシャルワーカーがもつ柔軟性	通常の自分の仕事のことは持ち込まないで、求められていることをする
				ソーシャルワーカーがもつ柔軟性とかっていうもの
	派遣ペアの学びあい	癒し	その場を楽しむ	ペアの人と、食事とか自由だったので、その場を楽しもうというとこで
				二人でいろいろ話しながら行けたのですごくそれは助かった
			つながるっていい	〇●で乾杯するのが儀式になってたり、つながることっていいなって思って
		二人派遣	少しだけずれて	少しだけずれて、活動する時は二人っていう
			二人で	全く二人で、入れ違い、重なることがなしです。
		非日常性	ワーカー同士で	ワーカー同士で数日間、合宿状態
			ちょっと刺激	有益っていうか、ちょっと刺激っていうか、面白く勉強になった
		学び	勉強になった	貴重な経験でした、訪問しなければ、そういうこともわからなかった
			スーパービジョン的	スーパービジョン的な雰囲気もそうだし、姿勢もそうだし
	生活の再開という問い	地域の再開	生活の再開	全てが一気になくなったあとの生活の再開について
				再開過程で核になることとは何かを考えるようになった
			生き延びた人たち	生き延びた人たちがどうやって生きていくのかっていうのを
			作って行けばいい	無いものは作って行けばいいかっていう、きっかけは災害でしたけれども
			個別のこと町づくりに	考えていかなきゃいけないんだろう、町づくりにどう関与していくかっていう
				ソーシャルワーカーは個別のことをうまく町づくりってとこに絡めていく
		再開過程で核になる事	孤立しないで	孤立しないでＳＯＳを出してくれたら、手を差し伸べてくれる人はいる
			食とストレス発散	仮設でも居酒屋さんとか焼き鳥屋さんとか、楽しみっていうのができてて
				食とストレス発散の場っていうのは、一番早くニーズが出てくるんだなって
			語り合える体制	話せる、語り合える、困ったなーって言える体制っていうのは必要
			就労	やっぱり、就労のところは話としていっぱいでてきました
			役割と居場所	そこにいるためにその人が役割を持てると居場所になりうる
				役割とか、彼らの生活の中心になるようなものをみんなでつくっていく

復興という答えの出ないスタートライン	帰ってきて還元できた知識・技術	クライエントとのかかわり	一緒に何かをしよう	一緒にやって行こうよっていう感覚は、震災活動の有益だったことの一つ
			今日の積み重ね	目標は横というか、今日どうするかっていう積み重ねなんだろうていうような
			人生重ねながら接点	理解できないことでも、自分とその人の人生重ねながら接点がないか
			今日を大事に	いつかは死ぬんだ、明日に向かって歩いている、今日を大事に生きよう
		災害への備え	災害が起こったら	いま、災害が起ったらこの患者さん達どうなるんだろうっていう視点
				自分の地域で災害が起こった時にどういう動きをするとか
		有益だった	実践でも有益	他のソーシャルワーク実践でも有益であった
			自分のために	自分のためにすべてをさせていただいたっていう感じがある
		曖昧な喪失	中途半端な辛さ	同じ亡くなっているでも、わかっている方はやはり死の受容がしやすい
				支援でも区切りみたいなのはしていった方が支援される方も楽なんだろう
		段取り	災害時の段取り	災害が起きた時、どうやって段取りを持って介入していくかってことを
		ふりかえり	ふりかえりの重要性	ふりかえりの重要性を感じた
有益ではなかった			有益という感じはない	有益っていうか、そういう風に全然まだとらえられない
				被災者支援活動に従事したことが直接的に有益になったという感じはない
ソーシャルワーカーとしてのありかたへの変化	かかわりに関する価値変容	すべてを失うということが起こりえる事	究極の地域	究極の地域を見て本質を知るっていう気づきはありました
			全部が消えてなくなる感覚	災害っていうもので一気に跡形もなく吹き飛んでしまう
				全てがなくなってしまうというのは、被災地支援の体験をしないと感じ得ない
				希望のとっかかりさえも奪い取られてしまう
				自分の実世界にも多分影響しているとおもいますね
		スタート・出発点	考える起点になった	考える起点になるという意味では、そこからどうするか、出発と考える
				百聞は一見にしかず、まずはそこを見ることがいろんなものを考える起点
			出発点がリアリティ	出発点がすごくリアリティ、生々しいものを見たから何ができるか
			スタート	所詮、無力なんだな、この状況からのスタートなんだろうなって思いました
				今の現場でも、あの震災から、できないことから始めようっていう感覚
		プラスくっついた	起りえるということがくっついた	プラスそういったこともあり得る、起りえるということがくっついた
				元の自分の考え方なり体験があって、そこがさらに膨らんだ
	災害ソーシャルワークへの関心	被災地との共振	行ってみたい	正直行ってみたいなっていう気持ち、6年経ったあの町を
			感謝	現地で知り合った方とかに、ほんとに感謝の気持ちがすごくある
			尊敬	しのぐっていうか、そういう風にやられている方々に、本当に尊敬
			どうしているだろうか	勝手な思いとしては、どうしているだろうか、大丈夫かなですよね
				行かせていただいた所とかが、今はどうなっているかとか気になります
			申し訳ない	帰ってきてストレスがかかるっていうのもなく、逆に申し訳ないという思い
				一週間の支援で入って、自分としてはなんか申し訳ない気持ちがあります
			すいません	遠くから何もできない、見守りもしない、すいませんしか言えない
				○○さんのもっと来てよっていう願いに応えられなかった
			行ってみた	行ってみたんですよ
			原発	小さなことですけど電気はまめに消そうとか
		風化させちゃいけない	かかわり続けたい	身近なところで、やろうと思えば、どこでも復興支援に携われるんだ
			視野が広がった	映像が自分のアタマにのこったので、現地のことが風化させちゃいけない
				ソーシャルワーカー人生に、すごく視野が広がって
			勉強をした	喪の作業に再び関心が向き勉強をした
	ＰＳＷの自立	組織への疑問	頑張ろうって思える	こっちの方が元気になっちゃって頑張ろうって思えるような方
			行ってよかった	あれだけは、自分が行って良かったんだなって思わせてもらえた
			考え始めた	被災地支援をする中で、ふつふつと考え始めたっていう感じです
		医療に縛られない	自分のＳＷ	自分のソーシャルワーク、支援に、何を大事にしなきゃいけないのか
			医療で縛られなくても	足元を、精神保健福祉士って、医療で縛られなくても仕事できる
				一般に広く通じるソーシャルワークができてる確認
変化はなかった			変化ではない	あるようで、あったようで、でもそんなに大きな変化ではないかな
				ソーシャルワーク、被災地支援やった時も、同じ感覚として思った

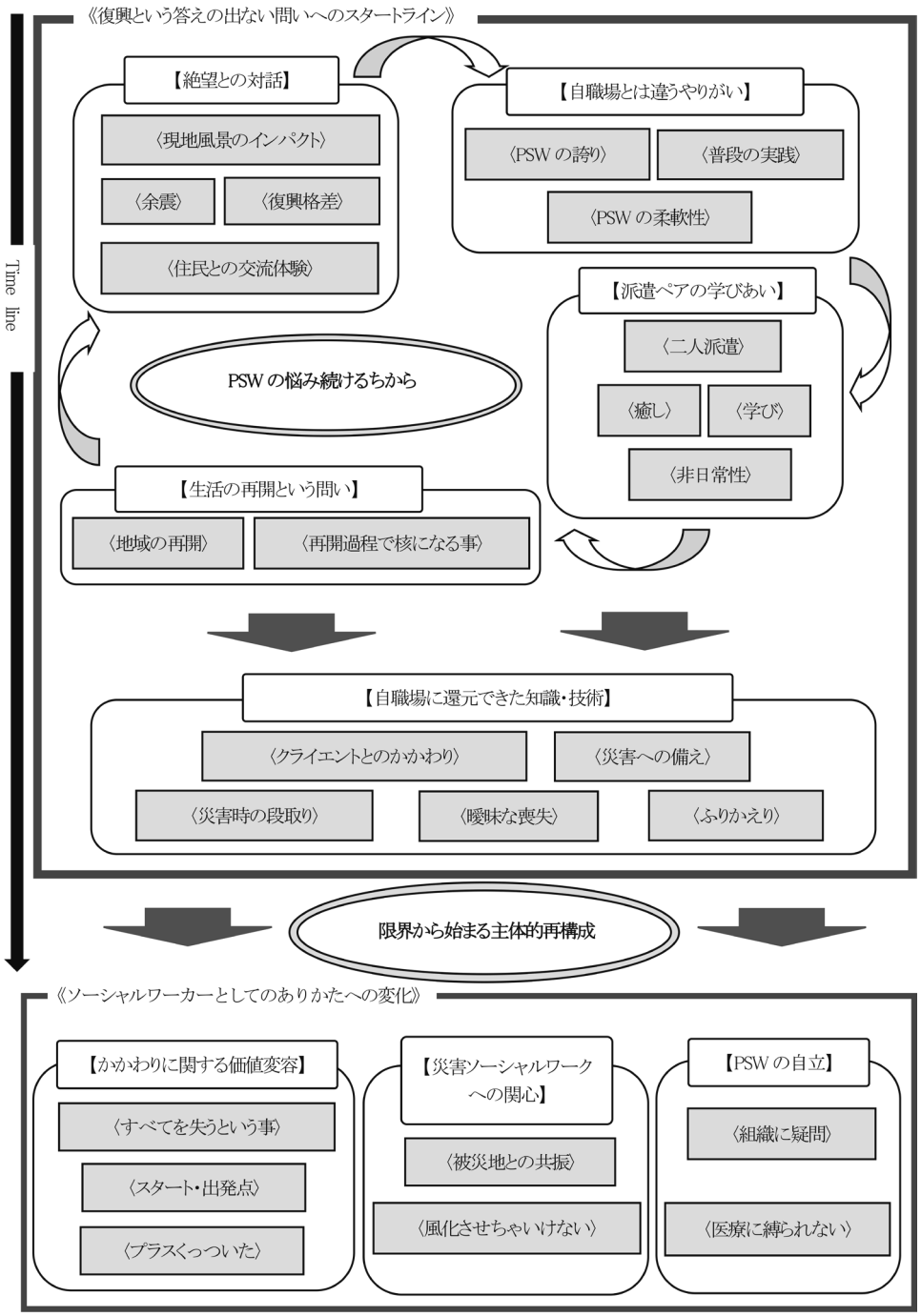

図 1　派遣活動に参加した PSW の変化のプロセス

3) 自分に有益だったと感じたこと

6 年を経過した後も、2011 年の南相馬あるいは東松島の風景に身を置いたことは、「ズドーンていう気持ち」と身体感覚を伴うインパクトのある体験であり、それを有益だったと感じている者が多かった。さらに被災者との交流体験という強い刺激から得られた様々な気づきを有益だったと感じていた。その一方で、派遣活動の体験を有益だったととらえることへの抵抗感、有益ととらえられないという感情も存在した。

4) ソーシャルワーカーとしてのありかたへの変化

派遣活動によって、PSW としての経験値が〈プラスくっついた〉というふりかえりがあり、それは自職場でのクライエント支援を見直す起点となっていた。また、被災地への様々な思いは継続し、身の回りの災害支援体制へと視野が広がり、災害ソーシャルワークに自発的にかかわる、学ぶ等の行動を起こした。また、派遣活動で得られた疑問や自信が、その後のキャリアデザインにまで影響した者もあった。一方で、派遣活動によって自己のソーシャルワークに関する価値観の変化はなかったという語りもあった。

5) 被災地への思いやメッセージ

被災地住民や支援者への感謝と尊敬が大半を占めた。訪れた場所や出会った人が「どうしているか」と配慮している。同時に、平時を過ごしていることや被災地への再訪ができていないことへの罪悪感があった。

Ⅶ. 考察

1．復興という答えの出ない問いへのスタートライン

派遣者が、復興という答えの出ない問いに気づき、悩み《復興という答えの出ない問いへのスタートライン》に立ったプロセスには、【絶望との対話】【自職場とは違う成功体験】【派遣ペアの学びあい】【再開という答えのない問い】の 4 要素が存在していた。

筆者は、この 4 要素に相互作用をもたらしたのは、派遣者同士の連帯感と PSW の「悩み続けるちから」であると考える。松本は、「悩む」を「揺らぐ」と「考える」の中間的存在として位置づけ、「PSW は、違和感や戸惑い、不安やわからなさと向き合い、それらを保ち続けながらこのプロセスを繰り返していくなかで、自らの実践を深化・進化させることが可能になる」と論じ、「「悩み続けるちから」とはこのプロセスを繰り返し続けていくちからのことである」としている（松本すみ子 2005）。筆者は、派遣者が被災者の絶望と出会い、戸惑いやわからなさと向き合い、その生活の再開という簡単には答えの出ない問いに悩み続け、それらを保ちながら、派遣活動後の実践を深化・進化させたと考える。その成果のワンステップが、【自職場に還元できた知識・技術】としての出力である。以下に各要素に関して考察する。

1) 絶望との対話

まず派遣地に赴いて、派遣者は〈現地の風景のインパクト〉に [衝撃] を受ける。報道等によって接触した情報とは「インパクトが違って」、「圧倒的な災害の爪痕」を体感している。そこに [戦争があったのか] と見紛うほどの [全体が灰色] な風景に身を置き、津波の痕跡を辿りながら「がれきに、ビデオテープが落ちていた」と生活の名残を脳裏に焼き付け、[ここで生活していた] 人の営みの手掛かりを得ている。さらに津波到達区域と、日常を維持している区域が隣接している状況の [不条理] に打ちのめされている。そして、〈余震〉を感じながら、[復興の速度の違い] に気づき、被災地に存在する〈復興格差〉を確認する。

派遣活動で「接するのは当事者」と想定していた派遣者もあった。実際は「新しくリスクを負われた」住民を対象とした [メンタルヘルス] 活動が主軸であり、家庭 [訪問] 等により〈住民との交流体験〉を重ねている。被災者との対話を通して、これまでの実践では対峙したことのないレベルの絶望の状況に接し、「わかりますかって言われて」、[なかなか飲み込めない] 苦しさを「記録に落としていくのに時間がかかる」とふりかえっている。さらに [PSW 行って何ができるのか][後ろめたさ][何ができたのかできなかったのか] 等

の不全感を語っている。

尾崎は、ゆらぎを「システムや判断、感情が動揺して葛藤する状態」であり、「混乱、危機状態を意味する側面」もあると定義している（尾崎新1999）。派遣活動の現場で派遣者は、わからなさや不全感に耐えながら、被災者の語りに耳を傾ける営みの中で、ゆらぎと向き合っていたといえる。つまり、派遣者は被災地の現場で自らの「ゆらぐことのできる力」を活用していたと考えられる。

また、このような [生々しい話] に接しながらも、被災者が [語るっていう役割] を取ることで心の均衡を保っていたり、[不安な事を出したい] という欲求を充足していたりすること理解し、聴くことが相手を受容することだったとふりかえっている。尾崎は、「「ゆらぐ」体験を不必要な混乱、破たんに導かぬよう支える土台、中心軸が「ゆらがない力」である」と論じている（尾崎新2002）。派遣者は、被災地という現場で、【絶望との対話】が専門職に与えられた役割であることを自覚している。これは、平時にそれぞれの現場で鍛えてきた「ゆらがない力」を活用していたと考えられる。

2) 自職場とは違うやりがい

協会の派遣活動のミッションである支援者支援の遂行には、〈普段の実践〉を活かすと同時に「自分の仕事のことは持ち込まない」「求められることをする」〈PSW の柔軟性〉が要求された。そのため、医療や福祉のサービス枠組みではない場所で被災者と出会い、かかわりを体験し、【自職場とは違うやりがい】が形成されていった。また、派遣者で繋いできた申し送りや記録の中に、「自分だけじゃなくても他の人も視点が生活に根づいている」ことに気づき、逆境にある「この人の生活どうしようって考える」[PSW の視点] の共通基盤を確認し、それは〈PSW の誇り〉として語られている。そして、派遣活動中は所属機関名や職名・肩書きを取り外し、[ソーシャルワーカー○○] として「より所属から離れた一人の PSW、ソーシャルワーカーという意識」を吟味し、メンタルヘルスを職能とする PSW が災害支援にコミットすることに [やっぱり精神保健福祉士]「P が大事」と同意している。このような派遣者同士の連帯が生成されたのは、派遣活動が自発的な専門職ボランティア活動であったことも一要因と考えられるが、結果として【自職場とは違うやりがい】を構成している。

3) 派遣ペアの学びあい

2011 年の派遣形態は派遣者〈二名派遣〉を基本としていた。活動中は [ワーカー同士] で行動する。移動や食事など [その場を楽しむ] ことが二次受傷を予防する〈癒し〉となっていた。特筆すべきは〈非日常性〉で、それは派遣者同士で「数日間、合宿状態」という濃厚な時間共有と、お互いの面接に陪席しあうような [ちょっと刺激] 的な体験によって構成される「面白く勉強になった」というような【派遣ペアの学びあい】の空間であった。また、ペア間に経験差がある場合、中堅 PSW とベテラン PSW との間に「スーパービジョン的」ムードが醸成され、かかわりや声掛けを、まさに背中を見て学ぶ「貴重な経験」、[勉強になった] という〈学び〉の場だった。

4) 生活の再開という問い

派遣活動中に、「全てが一気になくなったあとの」〈地域の再開〉という課題に気づき、[生き延びた人たち] に「希望を持ってもらう」という簡単には答えの出ない問いに突き当たる。一週間で去る派遣者の立場に無力感を抱きながらも、[個別のことを町づくりに] 紡ぐ PSW のコミュニティワーク機能を発動している。災害がきっかけでも無いものは［作っていけばいい］とポジティブに考え、〈再開過程で核になる事〉について [孤立しないで][語り合える体制]、[食とストレス発散]、[就労]、[役割と居場所] 等の現実的なイメージを構想している。

上野谷は、災害ソーシャルワークの基本的な考え方を、「生活は**継続**します。生活は**現実的**で、誰の生活も断片化できない**全体的・連続的**なものです。そして、他者が代わりに生きることなどできず、被災された住民が**主体**となるものです。」とし、ソーシャルワーカーの立場性を「住民自身

の**参加と協働的取り組み**が必須だということです」と述べている（上野谷 2013）(太字は上野谷のオリジナル)。短期交代による災害派遣活動に携わった者の多くは、被災者の生活と交流する。

支援者支援を自覚する派遣者は、安易な助言や介入の有害性をわきまえ、【生活の再開という問い】を考え悩み、ゆらぐ。しかし、被災地の支援者の苦労を肩代わりするような代理行為の陥穽に嵌まってはいない。この地にとどまり協働的な取り組みを展開することができないポジションの限界性の中で、《復興という答えの出ない問いへのスタートライン》に臨んでいた。

5) 自職場に還元でできた知識・技術

派遣者は、《復興という答えの出ない問いへのスタートライン》に立ち、モヤモヤとゆらぎながらも日常に帰還し、派遣活動を〈有益だった〉としている。まず、［災害が起ったら］クライエントに起こることを想定した〈災害への備え〉や自分の地域の〈災害支援の段取り〉への注意を促進している。さらに、「今の現場」での〈クライエントとのかかわり〉が［一緒に何かをしよう］、［人生重ねながら接点］を探そうという感覚や「命は有限」だから［今日を大事に］生きようという姿勢に変化したことを自覚している。また、被災者との対話から〈曖昧な喪失〉による［中途半端な辛さ］を学ぶことで、クライエント - ワーカー関係の「区切り」のあり方について考察している。このように、派遣者は派遣活動から気づきを得て、それを自己の実践の文脈に置き換えて意味づけし、【自職場に還元できた技術・知識】として持ち帰っていた

２．ソーシャルワーカーとしてのあり方に定着した変化

前述の通り、《ソーシャルワーカーとしてのあり方に定着した変化》は、【かかわりに関する価値変容】【災害ソーシャルワークへの関心】【PSW の自立】で構成している。各要素について以下に詳述する。

1) かかわりに関する価値変容

被災地という［究極の地域］に赴き、地震と津波によって「跡形もなく」「希望のとっかかり」さえも奪われた被災者の絶望との切り結びによって感じえた［全部が消えてなくなる感覚］をふりかえり、派遣活動によって〈すべてを失うという事が起りえる事〉を知り、「自分の実世界に影響」していると考えている。これは東日本大震災の現場の特殊性であるが、そのインパクトは日常に染み込み、「そこからどうするか」「何ができるか」「できないことから始めよう」という〈スタート・出発点〉から、「元の自分の考え方なり体験」に〈プラスくっついた〉という今の【かかわりに関する価値変容】と連続している。

2) 災害ソーシャルワークへの関心

派遣者は、「6 年経ったあの町」が［どうしているだろうか］と思い〈被災地との共振〉を継続している。さらに「映像が自分のアタマにのこった」から〈風化させちゃいけない〉という問題意識を持ち、「身近なところで」協会の災害支援体制整備活動に参画した、災害に「アンテナ、関心」を向けることで［視野が広がった］、「喪の作業」等の災害支援にかかわる［勉強をした］等の行動を起こしている。これらの行動変容は【災害ソーシャルワークへの関心】の萌芽である。

3)PSW の自立

派遣活動で体感した【自職場とは異なるやりがい】は、［行ってよかった］という有用感や［支援って］〈何を大事にしなきゃいけないのか〉を考える有益性にとどまらず、【PSW の自立】を促進した。それは「ふつふつと考え始めた」〈組織に疑問〉や、〈医療に縛られない〉でも機能している自己の確認であった。木下は、自立したソーシャルワーカー像を「所属組織の日常業務に加えて、そこに組み込まれていない残りのソーシャルワーク機能を、所属機関の意向や枠組みを超えて展開できる者」としている（木下大生 2015）。派遣活動は、所属機関に組み込まれていないソーシャルワーク機能を展開する場であり、そこで「ソーシャルワークがちゃんとできている」と実感できたことは PSW のストレングスである。

３．PSW の変化の動因は何か

1) 一皮むける経験

保正らは、11 人のソーシャルワーカーの生活史から、専門的力量形成のきっかけとなった経験や出来事を一皮むける経験として抽出・検討している（保正友子ら 2003 年）。その共通項を、「自らの拠り所とする集団が所属組織内か組織外のどちらか 1 つに分けられるものではなく、組織内外を問わず、ソーシャルワーカーとしての役割を果たすなかで力量を形成してきたこと」と明らかにしている。派遣活動は、派遣者にとって、こうした専門職的力量形成のきっかけとなった経験や出来事になりうると考える。

2) 限界から始まる主体的再構成

横山は、「自らの実践経験のなかで身体感覚を含めてあらためてソーシャルワークとは何か、ソーシャルワーカーとはどのような人かを納得していくこと」をソーシャルワーク感覚と定義し、PSW のソーシャルワーク感覚としての援助観の生成プロセスを明らかにしている（横山登志子 2008）。このプロセスの注目カテゴリーの一つが「限界から始まる主体的再構成」であり、「当初の援助スタンスがいったん崩壊し、痛みをともないつつ再構成され、あらたに意味づけが生成されるというプロセス」と説明している。筆者は、横山が「限界から始まる主体的再構成」の重要契機であるとしている「疲弊体験」が派遣活動体験に重なると考える。すなわち、派遣活動という疲弊体験に対応して「限界から始まる主体的再構成」が発動し、自分の閾値を超える感覚が訪れ、PSW としてのあり方に定着した変化が形成されたと考える。

Ⅷ. 結論

本研究より次のことが明らかとなった。派遣活動に参加した PSW は、被災者の絶望と対峙しゆらぎを経験した。ゆらぎにとどまらず、「ゆらがない力」や「悩みつづけるちから」に依って、復興という答えの出ない問いのスタートラインに立った。復帰後、自職場の実践の文脈にその意味を見出し行動化した。さらに、「限界から始まる主体的再構成」が発動し、自分の閾値を超える感覚が訪れ、かかわりに関する価値変容、災害ソーシャルワークへの関心、PSW の自立が結実した。

本研究の限界は、調査対象が都内近県からの派遣者に限られている点にある。また、派遣活動をネガティブな体験として残遺していない派遣者だけが調査に同意しているという批判は免れない。

Ⅸ. おわりに

東日本大震災によって失われた命やそのご家族、関係者の皆様に哀悼の意を表し、未だ苦難の中で生活されている方々の悲しみを分かち合う社会が訪れることを祈念する。

【引用文献】

・安倍芳絵 (2012)「災害ボランティアのゆらぎと支援者ケア・学習者としてのボランティアの視点から」『早稲田教育学研究』3,27-41,

・保正友子・竹沢昌子・鈴木眞理子ほか (2003)『成長するソーシャルワーカー　11 人のキャリアと人生』165, 筒井書房

・石田易司・谷内祐仁・脇坂博史ほか (2013)「学生の災害ボランティア活動と教育効果『桃山学院大学社会学論集』47(1)

・池埜聡 (2012)“The Great East Japan Earthquake：How does social work do for the traumas?” Social　Dialogue, Vol.2, IASSW,

・木下大生・後藤広史・本多勇ほか (2015)『ソーシャルワーカーのジリツ―自立・自律・而立したワーカーを目指すソーシャルワーク実践』63, 生活書院

・小林功英編 (2014)『災害ボランティア経験が持つ大学生への教育効果』高等教育研究叢書 / 広島大学教育研究センター

・公益社団法人日本精神保健福祉士協会「東日本大震災・支援活動記録集」編集委員会編集 (2015)『東日本大震災・支援活動記録集』

・松本すみ子 (2005)「悩み続けること、その創造的なちから　PSW 実践が深化・進化していく過程と『悩み続けるちから』『精神保健福祉』36(2),136,137
・野中郁次郎・竹内弘高 (1996)『知識創造企業』13，東洋経済新報社
・大塚淳子 (2012)「日本精神保健福祉士協会による支援活動と連携・調整」『病院・地域精神医学』pp.36-39.
・尾崎新編 (1999)『「ゆらぐ」ことのできる力―ゆらぎと社会福祉実践』19, 誠信書房
・尾崎新編 (2002)『「現場」のちから社会福祉実践における現場とは何か』384, 誠信書房
・西郷達雄・中島俊・小川さやかほか (2013)「東日本大震災における災害医療支援者の外傷後ストレス症状：侵入的想起症状に対するコントロール可能性と外傷後ストレス症状の関連」『行動医学研究』19(1)，3-10
・上野谷加代子監修　社団法人日本社会福祉士養成校協会編集 (2013)『災害ソーシャルワーク入門～被災地の実践知から学ぶ～』17-18, 中央法規出版
・横山登志子 (2008)『ソーシャルワーク感覚』36,111, 弘文堂
・兪善英・古村健太郎・松井豊ほか (2016)「東日本大震災被災地に派遣された消防職員のストレス症状と外傷後成長」『心理学研究』87(6)，644-650

【参考文献】

・川喜多二郎 (1967)『発想法　創造性開発のために』中公新書
・木下康仁 (1999)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ―質的実証研究の再生』弘文堂
・田中千枝子編集代表　日本福祉大学大学院質的研究会編 (2013)『社会福祉・介護福祉の質的研究法―実践者のための現場研究』中央法規出版
・土屋雅子・齋藤友博 (2011)『看護・医療系研究のためのアンケート・面接調査ガイド―初心者にもできる質問紙・インタビューガイドのつくり方』診断と治療社